「逃げない」を貫く

大阪電気通信大学学長
大石　利光さん(61)

国境の島・対馬の南端に内院という小さな集落がある。対馬海峡に面するそこの漁師の家に生まれた。9人きょうだい（男5人、女4人）の末っ子だった。地元の高校に行きたかったが、そんな余裕などないことはわかっていた。生活のために島を出て働くほかなかった。

中学校に来ていた求人案内に、大阪の企業のパンフレットがあった。そこに勤めながら夜学に通おうと決心する。中学校の卒業式の前だったが、特別に校長室で卒業証書をもらい、一人で島を離れた。15歳の春であった。会社の寮に入り、府立城東工業高校の定時制に進んだ。

大阪で働いたのは、家電メーカーの外注を受けてテープレコーダーを製造する会社だった。流れ作業に携わる仕事だったが、4年生のころは自分でテープレコーダーなど家電製品の設計図を描けるようになっていた。夜の授業を終えると、学校からまた会社に戻り、設計の仕事に没頭した。その間、実家への仕送りも続けていた。

高校卒業後もそこに残り、合わせて十数年勤めた後、別の会社を経て、設計の仕事を続けたいとコナミ工業に入った。高齢化社会で健康意識が高まる中で、コナミグループはスポーツクラブを全国で展開するほか、健康関連機器の開発、製造、販売などを行っている。

40歳のころの大石さん。後方の車の体感ゲーム機を設計、開発した　＝東京、コナミ（本人提供）

高卒から民間社長を経験

コナミに入社すると、これまでほとんど独学で勉強してきた設計を担当し、在職中、63に上る機器の開発、商品化を手がけた。この中にはランニングマシンなど30件を超す特許もある。これらの業績が評価され、コナミスポーツライフ社長を務めた後、合併してできたコナミスポーツ社長に抜てきされた。

社長退任後、大阪電気通信大学医療福祉工学部健康スポーツ科学科教授に迎えられた。コナミ勤務当時から健康スポーツ科学科との産学連携に取り組み、マネジメントにも実績があったことなどが教授招聘の理由だ。

そして、定時制高校を卒業、民間企業の社長を経験、研究・教育のトップである学長という異色の経歴である。「周りに助けられ、人との出会いもあった」「ただ、何があっても目の前のことから逃げなかった」と振り返る。

「実学」を建学の精神とする同大は現在、5学部で学生数5400人、教職員数240人を擁する。もの作りの現場をよく知る学長に、学生に求めることを聞くと、「技術力」とともに、あいさつがきちんとできる、社会に通用する「人間力」を磨いてほしい、と強調する。

大学は国、公、私立を問わず、厳しい生き残り競争の時代にある。経営トップとしての経験を持つ学長は「大学はこれから運営をどうしていくかというマネジメントが一層大事になる。風通しをよくし、実社会で羽ばたける学生を輩出したい」と語る。コミュニケーションづくりのため、教職員とのランチ・ミーティングも始めた。

貧しかった故にふるさとを早く離れた。けれど貧しさを悲観したことは一度もなかったという。たまに帰郷するが、ふるさとへの思いはことさらに深い。

文・特別編集委員　峠　憲治
写真・写真メディア部　荒木勝郎

「知識だけでなく、実社会で通用する人間力を培う大学にしたい」と語る大石利光さん　＝大阪府寝屋川市、大阪電気通信大寝屋川キャンパス

取材のあとで

江戸後期の米沢藩主で、藩政改革に力を注いだといわれる上杉鷹山についてはさまざまな人たちがふれている。山形県鶴岡市出身の作家藤沢周平も、絶筆となった『漆の実のみのる国』で、鷹山の生涯を描いた。

ろうそくの原料となる漆の実を採取するため漆の木を育てるなど、殖産振興をはじめとして疲弊した藩の再生に尽くした鷹山に、よく知られる次の言葉がある。「為せば成る　為さねば成らぬ何事も　成らぬは人の為さぬなりけり」

波乱に富む半生を送ってきた大石利光さんは、この鷹山の言葉に折々、教えられてきたという。「確かに、ものごとが途中でうまくいかなくなるのは、自分の信念や考え方がどこかぐらついている時だと思います」

プロフィル

おおいし・としみつ　1955年、対馬市厳原町生まれ。働きながら大阪府立城東工業高校（現城東工科高校）定時制を卒業した。同校OBには建築家の安藤忠雄さんがいる。87年、コナミ工業に入社。2003年、コナミスポーツライフ社長。05年、コナミスポーツ（現コナミスポーツクラブ）社長。10年、大阪府寝屋川市と四條畷市に三つのキャンパスを置く大阪電気通信大学の医療福祉工学部教授に就任。同学部長、同大理事などを歴任し、ことし4月から学長。専門は健康運動科学、ヘルスケア機器研究開発。趣味は、実家が漁師だったので海釣り。

長崎新聞　2016年6月26日（日）16面（提供：長崎新聞社　転載許可済）